

(対談)

西加奈子×ウティット・ヘーナムーン×アヌソーン・ティパヤーノン×インティラー・ジャランプラ
——クリエイティブな反逆者たち？

司会(MC): インティラー・ジャランプラ

英語編集: ニッチャリー・パティティット

通訳: アット・ブンナーク

主催: 国際交流基金バンコク日本文化センター、ネルソン・ヘイズ・ライブラリー

2019年11月17日、タイ・バンコクにて「第1回ネルソン・ヘイズ・ライブラリー文学フェスティバル」が開催された。国内外から第一線の現代作家が集うこの場に、日本からは直木賞作家・西加奈子が参加。「タイの村上春樹」と呼ばれるアヌソーン・ティパヤーノン、タイ現代文学の旗手であるウティット・ヘーナムーンとともに、小説以外の創作活動および執筆作品との関係について意見を交わした。



■文章の先へ: 文章以外の方法を用いた自己表現

インティラー・チャルーンプラ (以下、インティラー): 西さんは文章以外の表現方法を試されることはありますか。例えば、ウティットさんはアート、アヌソーンさんは食にも精通されていますよね。

西加奈子(以下、西): 小説を執筆するほかに絵を描いています。私の小説の装丁画の多くは私が描いたもので、展覧会でも披露しています。その他にも、絵本を三冊出しています。

インティラー: ストーリーの表現方法はどのように決められていますか？ このストーリーは文章を通じて表現したい、このストーリーは絵を使おう、でもこっちのストーリーは食べ物やスケッチを使おう、というように、どうして分かるのですか。



西: 私の場合、基本は小説の形式でストーリーや考えを表現します。その次にアートを通じて、ビジュアルを表現します。いまご覧いただいているアート作品は『I』という小説の表紙です。題名は「I」(自分自身)、または日本語で愛を意味する「アイ」、どちらを表すこともできます。このアート作品は小説と展覧会で使ったのですが、海に関係しています。どうしてかというと、本の結末で、主人公は生まれ変わり、再びこの世に生まれてくるために海に飛び込むからです。ギャラリー

で展覧会の準備をしている際、表紙の絵にこの海を描くことをひらめきました。展覧会では絵を 360 度に配置することで、訪れる人々にまるで海底にいるかのように感じてもらい、そして人間の体の中からもう一度生まれてくるような感覚を覚えてもらえるようにしました。

インティラー: 絵を描くことと文章を書くことは深く関係し合っているんですね。ウティットさんも絵を描かれますよね。執筆されている文学作品中の登場人物と描かれている絵には、実は隠れた関係性があるのではないのでしょうか。

ウティット・ヘーマムーン (以下、ウティット) 大学で視覚芸術を学んだので、もともと私の経歴はアートに関連しています。しかし執筆を始めてからは、私の最新作『プラータナー 憑依のポートレート』までアートに関する活動は何もしていませんでした。自分自身の可能性を探っていたというのでしょうか。文学の境界線を全く新しい領域まで押し広げようとして頑張っていました。

インティラー: はじめに、『プラータナー 憑依のポートレート』は、本の形式からデザインに至るまでとても実験的な作品だと言わせてください。特定のデザインやスタイルを選んだ真の理由をお聞かせください。

ウティット: 私たちは、あらゆる種類のアートに相関性がある時代を生きていると思います。そのような思いが発端となって、執筆を始める前に学んだスキルを活かして文学を他の形式のアートと融合させることにチャレンジしてみたいと考えたのです。

インティラー: アートを勉強されたからですか？

ウティット: そうです。アートそのものに対する疑問や、小説の中で描かれているテーマにもつながっています。小説の登場人物がきっかけとなり、また絵を描くことにしました。彼は、絵を通して自分の物語を伝える、という人物なのです。このコンセプトは小説のデザインやイラストにも通じています。私の絵はかなり直接的でエロティックなので、こちらのスクリーンに映すことは控えます(笑)。

インティラー: ぜひ見てみたいです。ウティットさんはヌードを描くワークショップを特集した展覧会も開かれたのですね。開催した理由をお聞かせください。

ウティット: ヌードや社会的なタブーに対する主流の考え方を理解したいと思ったのです。適切か否か、または道徳的であるかどうかという観点から考えると、大多数の人々は、公に晒すものではないと言うでしょう。しかし、性的な目で見るとはなく、アートを通じて違う見方をすることができるのであれば……。

インティラー: 露骨で下品なものではない、ということですね。

ウティット: そうです。ヌードを目にすると、反射的にまず嫌悪感や拒絶感を覚えませんか。「脱ぐ理由がわからない」と考えませんか。しかし、最初に拒絶感を覚えることで、学ぶ機会を逃しているのかもしれ

ません。人体構造の美しさや驚異を、いままでとは異なるレンズを通して見るようなものだと思うください。裸体を道徳的な観点ではなく、違う視点から見る事ができれば、それは下品なものではなく、インスピレーションを与える存在になるのです。

■執筆、自己防衛、その他情熱を注ぐもの

インティラー: アヌソーンさんは食の活動家としても活躍されています。今日の対談は人間の生まれながらの原始的な性質に遡るように感じられるのではないのでしょうか。ウティットさんのお話は、裸の状態といいますか、原始的な形式に戻るようなものでした。西さんは海を通じて自然とつながり、そしてアヌソーンさん、あなたには食があります。そこで、なぜ食べ物なのか、お話を聞かせてください。ご存じの方は多いかと思いますが、最近タイ料理に関する議論が繰り広げられていますよね。一言にタイ料理といっても、正式なもの、本格的なもの、そして家庭料理のタイ料理もあるとのこと。あなたの執筆作品は、このような疑問や議論から生まれているのでしょうか。



アヌソーン・ティパヤーノン（以下、アヌソーン）: 実は、このような疑問や議論はあまり関係ありません。本格的なタイ料理やモダンなタイ料理、タイ料理ではない料理もありますが、食べ物であれば、食べますよね。もっとも、この二人、西さんとウティットさんと比べると、料理や食べ物はアートではなく、趣味に近い、と言いたくなるかもしれません。執筆中は教授職にも就いていました。実は、作家も教授もとても孤立した職業なんですよ。自己完結型、といえいいでしょうか。執筆を始め

て、書き終わると、講義の準備をする。全ての作業が同じ机の上で行われます。変わることといえば、作業内容と使用する資料だけです。短編小説に使う文献が、講義に必要な論文に変わります。自己完結型の生活にどっぷりと浸かっていると感じ始めるようになるまで、何年もこの生活は続きました。ルーティン通りに生活し、ベッドで寝て...

ウティット: ベッドにはひとりで？

アヌソーン: どうやらエロティックなテーマを扱って活動しているアーティストは深読みし過ぎるようですね。いつだってそのように解釈してしまう。ええと、そのうち他人と交流する機会がほとんどないと感じるようになりました。次に、体調を崩し始めました。執筆中はコーヒーとタバコの量が増えるので、健康に悪影響がありました。ウティットさんのようにビールは飲みませんけどね。そこで村上春樹の本を思い出しました。彼は有名ですし、彼の小説のファンは多いと思います。私に影響を与えた著書は、彼がランニングについて書いた本です（註：『走ることについて語るときに僕の語ること』）。執筆を続けたければ、そのための体力が必要だと。一息つくためにとコーヒーやビールなどをとって、体の内部を酷使してはいけない、と。もっと健康的な選択肢を持つべきなのです。

しかし、私の膝はランニング向きではないと気が付いたので、他に楽しめることを考えました。そして料理が好きだと気が付いたのです。ロンドンに住んでいたころ、料理を楽しんでいました。料理を作っている間は、8 時間休憩なしでも飽きることがありません。活動的になるので、新しい出会いもあります。そこで「もう一度料理を始めようかな」と考えるようになりました。そんな感じです。

インティラー:料理をすることで元気が出る、ということでしょうか。

アヌソーン:そうですね。「料理をしない」でいることを、やめることにしました。私の後輩はこちらにいらっしゃるウティットさんのようにビールが好きなので、地ビール作りに誘ってくれました。ですが、それはあまり気乗りしなかったのも、他に食べ物関係で、私にできることがないかと、話し合いました。その日の夜、帰宅してから「手の込んだ食べ物」といいますか、醤油や発酵食品など手間と時間をかけてつくる食品で、私が作れるものはないかと考えました。タイの発酵食品にチャレンジすることで、イサーン地方(タイ東北部)など、行ったことがない場所を訪れることになるでしょうし、太陽や風を感じながら自然と触れ合えるだろうと思ったのです。

インティラー:たしかに以前より身体の調子が良さそうですね。

アヌソーン:最近のトレンドはサステナビリティで、家庭菜園を始める人もいるようですが、私はそのトレンドには乗りませんでした。私は「部屋の中に閉じこもって作業をするのではなく、人と交流したい」と思い、部屋から出て地方に向かいました。地方での私の日常は基本的に、バイクで出かけたり、地元の人たちに発酵食品の作り方や魚釣りの場所などについて聞いたりするものでした。実際に発酵の段階からチャレンジしました。成功したこともあります、いまいちだったこともあります。ご近所の方々にお裾分けしたこともありますよ。すると、まわりの人たちは私がなにをしているのか気になり始めて、話しかけてくれるようになりました。そういった流れで、地元の人たちが料理をするときに私も誘ってもらえるようになりました。

最近のトレンドは食です。たくさんの料理人が私と話すことに興味があるようで、例えば、「どうしてこんなことをしているのか」だったり「食の魅力」だったり、を聞かれます。そこで、料理を始めて、口にする食べ物の 9 割は大企業が作っていると気付いたと、話しました。地方に暮らす子供を持つ女性と、興味深い会話をしたことがあります。「昔と比べ子供を育てることは楽になりました。セブンイレブンに行ってください、とお小遣いを渡してあげればいいのですから」と彼女は言ったのです。ハッとしました。泣いている子供にはコンビニで買い物ができるようにお小遣いを渡す。近所の商店を利用するのは高齢者だけになるかもしれません。そこで売られているものはオーガニックだとか、そのような呼び方はしません。普通に育てて、収穫して、売っているだけなのですから。

インティラー:サステナブルな経済や地域というような美化した響きにしたくないのですね。

アヌソーン:書物だけあればいいというような世界から抜け出したかったのです。人と出会って、交流がしたい。そういう思いから行動をしました。料理人たちと出会うようになり、他の活動もやってみないかという話になりました。私が研究好きだと知って、彼らが食に関するワークショップを開催する際に、ナン

プラー(魚醬)やタイ風アンチョビの歴史について講演をしたり、それらに関する研究をしたりしてほしいと頼まれたのです。この経験のおかげで、人をもっとよく知ることが出来たし、私の文章にも影響していると思います。人間は食べるようにできているのだと、考えるようになりました。いつも言っているように、人間にとって二つ大切なことがあります。空気と食べ物です。息ができなければ、人は苦しみます。そして食べるができなくても、やはり苦しむのです。最近、ちゃんと食べていますか？ 考えてみてください。料理を作る人は少数。家で料理をするために食材をスーパーで買う人もごく僅かです。

インティラー:調理済みの食品を買い、電子レンジで温めるだけで済ませてしまいますね。

アヌソーン:そう、調理済みの食品を買いますよね。インティラーさんはレストランを経営されているから、お分かりいただけだと思いますが。結局のところ、我々が急激に、そして大幅に失っている能力は料理を作る力だと思うのです。でもそれはおかしいですよね・・・

インティラー:コンロなどが必要だから、いろいろ大変だと言う人もいますよね。

アヌソーン:でもそれはおかしいですよね、料理以外のスキルはすごく頑張って手に入れようとするのに。例えば、割れた腹筋が欲しいとジムで時間を費やしますよね。その一方で、地方に住む地元の人たちは、夕暮れ時や夜明けになると台所の煙を見て、それが朝なのか夕方なのか判断することができます。地方で朝 4 時や 5 時に起きると、すぐに煙を見ることができるのですよ。私はその瞬間、人生これでいい、と感じました。執筆したり、地域に貢献したりしていればいいのだった。

インティラー:みなさんがアヌソーンさんとフェイスブックでつながっておられるかわかりませんが、彼がバイクでビールを買いにでかけたり、自転車に乗っていたりする様子の投稿は読んでいるととても楽しいんですよ。語り手が楽しんでいる様子を読み手も楽しめるといふ、タイプの違ったストーリーになっています。活動を通して社会になにか影響を与えたいと思われていたのでしょうか。

アヌソーン:そうですね、はい。安定した食の資源を持つという健全なニーズがあれば、社会は良い方向に進むのではないかと、心のどこかで思っていました。最近では将来有望なシェフがたくさんいますし、その中には食に関することを発信しようとするシェフもたくさんいて、フードコラムなどもあちこちで目にします。だからこそ食に関する歴史や、食文化について注目を集めることができる人がひとりでも必要なのです。タイ風アンチョビは、なぜ、同じような刺激的なおいを放つチーズより下にみられるのでしょうか。チーズもタイ風アンチョビもどちらも発酵食品ですが、パーティーではワインとともにチーズがふるまわれ、においなど気にされていません。これは、私たちが食べ物に持つ特定の印象の結果ではないかと思います。作家がこの事実注目すれば、私たちの言葉によって、人が食べ物に持つ印象を変えることができるのではないかと思います。私の最新作も、このコンセプトに沿っています。

■作家の役割、そして文学の将来

インティラー：既存の方法と新しい方法を組み合わせる。例えば、ウティットさんとアヌソーンさんの場合、ウティットさんは道徳的な境界線を崩そうとし、アヌソーンさんは地元の食べ物に対する印象に新たな概念を生み出したい、というものがありますよね。西さんは、言葉を使う以外の方法を通じて発信したいアイデアをなにかお持ちでしょうか。

西：この二人のようなスキルは、私にはありません。私にできることは、小説を書き、自分のために絵を描くことにある意味限られていると思います。ですが、たった今アヌソーンさんが食に関することを話したことで、あることを思い出しました。日本では、作家が二人で対談してコラムを執筆したり、トークショーをスペシャルイベントとして行ったりすることがあります。イスラエルの作家エドガル・ケレットさんとシンポジウムに参加した際、高等教育を受けた人たちには文学は楽しめるでしょうが、文学というものは難しいと感じられるようになり、「文学」という言葉自体がインテリ向けになっているのではないかと、意見がまとまりました。

反対に、YouTube やゲームで目にするものは、ハンバーガーのようなファストフードのごとく親しみやすいものになっています。オイシくて消費しやすいですから。これらはジャンクにみられがちですが、それでも消費されますよね、オイシイのですから。例えるならば、小説や文学が野菜、そしてゲームなどはハンバーガーでしょう。小説や文学は野菜のようだと思います。野菜は身体にとっては有益ですが、ハンバーガーのほうが美味しいと思われ野菜は積極的に摂りたいとは思われないことも多い。ハンバーガーは安いし、脂肪分もたっぷり美味しいですよね。文学を難しいものと捉えられることは悲しいです。文学作品やそれらの文化をみると、ポップカルチャーやポピュラーなものに結び付きがあり、味もよく栄養価値も高い、プラスになるようなことも多くあります。



その一方で、YouTube の動画やゲームのように、栄養価はなくても味わって楽しめるものもありますよね。文学は高尚なものでも、不朽なものでも、手の届かないものでもない、ということをみなさんに届ける声になりたいので、私はメディアで活動するようにしています。文学の中には手軽で、美味しく、そして理解しやすいポップカルチャーの共感を得るような作品もあります。文学は手が届かないものではないのです。

インティラー：日本は読書をする文化がタイより根付いています。その日本の作家なのに、心配なのですね。タイではどうなのですか？ より厳しそうですが、アヌソーンさん、それも理由のひとつなのですか？ 文章を書くだけでは不十分であり、他の方法を通じて表現をする必要があるのでしょうか？



ウティット: 先に私に答えさせてください。すごく興味深い質問だと思います。人生における作業工程に注目すると、いろいろなことによって成り立っていることが分かります。当然ながら、私自身のことでいえば、アートの境界線をどれだけ越えることができるかということが人生のすべてではありません。自分の人生であっても、耕し、面倒をみないといけません。身体面の健康にも気を遣っている私としては、アート活動することで身体とメンタル両面の健康にプラス

になります。文学活動は、個人的にはエネルギーを費やし過ぎると感じています。なんというか、エネルギーの消耗が激しいというのでしょうか。

インティラー: こだわりすぎるせいでしょうか？

ウティット: 絵を描くときに使うエネルギーとは、また別のものです。簡単にいうと、執筆活動は自分をギュッと絞りだしているような感覚です。間違えることも許されません。でも、絵は間違えてもいいのです。

インティラー: もっと肩の力が抜けて、自由がある。自分にプレッシャーをかけることもない。

ウティット: 間違えても大丈夫。人生は終わらない。この世の終わりでもない。アートの作業工程では間違えることは許されるので、人生が終わったと感じることはありません。

インティラー: 自分自身と会話をするために行っているようなものなのでしょうか。

ウティット: それもあるでしょう。事実、私たちの人生で起こることはすべて、誰かに伝えられる前に、答えは自分自身の中に出ていますよね。それに、絵のほうが本より、比較的売れます。なんといえいいのでしょうか。経済面では助かります。

インティラー: メンタルや身体の健康をケアするための資金といいますか。それは否定できませんよね。

ウティット: そうですね。私の本の読者数は、具体的な数字でいうと 1,500 人くらいだと思います。

インティラー: ご自身で出版社をお持ちですからね。

ウティット:ですので、この 1,500 人の方々には私が書いた本を買ってもらえると思うのです。以前は 2,000 から 2,500 人くらいだったので、だいぶ変わりましたね。私が書いた小説が賞を受賞し¹、部数が 50,000 から 60,000 部を達成したときと比べてもだいぶ違いますね。なので、毎回新しい本を出すときは、500 部売ればいいと思っています。

インティラー:一方は多くのエネルギーを要するが、魂に栄養を与える。もう一方は、エネルギーはあまり消耗しないが、自分を維持するのに役立っている、ということでしょうか。

ウティット:たくさんのエネルギーを消費し、1 年かけて本を執筆しても、本を 500 部売って得た収入では生活していけません。1 年どころか、3 か月も無理でしょう。500 冊で、50,000 バーツの収入です。それで生活するのは無理でしょう。他にも頼るしかありません。私の作品をコレクションしてくれている、昔からのコレクターや新しいコレクターの方々がいます。絵を 1 つ売ることができたならば……

インティラー:家計に余裕ができるということですね。

ウティット:はい。人生をどのように管理するか、ということです。作品に興味を持ってもらえるように、鋭い知性を持ち、健康的に生活するためには、きちんと自分自身を大切にしないはいけません。アヌソーンさんも、さっき言いましたよね。身体や健康をないがしろにすると、最終的には倒れてしまいます。悪化するときは早いですよ、あっという間です。

■登場人物を通じて表現する作家の声

インティラー:アヌソーンさんは役者もされていますし、お仕事の範囲は広いですね。

アヌソーン:いいえ。

インティラー:否定するのですか？ 同じ業界で働いているじゃないですか。

アヌソーン: 違いますよ。役者は、私の職業ではありません。たまに、生徒や知り合いから手伝ってほしいと頼まれるだけです。

インティラー:ですが、楽しいと思わなければ、断ることだってできますよね。演技をする上で感じる楽しさについてお話ください。食に関するフィールドワークは、楽しんでやっていたらしゃるし、面白くて人に伝えたいことだと思われそうですよね。演技に関して同じように感じられることはありませんか？

¹ 2009 年、東南アジア文学賞 (S.E.A Write Awards) 受賞、ウティット・ヘーマムーン著『ラップレー、ケンコーイ』

アヌソーン:とくにはありませんね。演技をするときは、想像してみることはできるかもしれませんが・・・執筆しているときは、登場人物が何をするかは私たちが指示していますよね。他人が作ったキャラクターになり、その登場人物を通じて話すとはどのような感じが知りたかったのです。それぐらいですよ。

インティラー:控え目に言われていますよね。よく撮影現場に立たれているじゃないですか。演じることで新しい経験をすることもありますよね。

アヌソーン:そうですね。二作品続けて娘を持つ父親の役を演じる、なんてことがあるのですが、子供を育てた経験がないので、そのキャラクターの気持ちを想像しなくてははいけません。子供の送り迎えをしたり、子供とケンカしたりする気持ちがどんな感じが、役を通じて分かるのです。



インティラー:メディア業界について掘り下げて執筆しようと思ったことはありますか？

アヌソーン:ありません。だから、あなたを尊敬しているのです。2日間撮影現場に立っただけで、疲れ果てました。朝6時に集合して、たくさんのスポットライトを浴びせられる。大変ですよ。きつい仕事だと思います。インティラーさん、あなたは本物のプロですよ。私には毎日ではできません。3、4日で十分です。

インティラー:最初は楽しいですよ。でも、次第に・・・

アヌソーン:そうなのです、撮影中の待ち時間の過ごし方とか。集中できないので、なにか読むということもできません。そういう時間が好きだとは言えないですね。撮影中は、無駄になる時間も多いと思います。

インティラー:同感です。

アヌソーン:そういった意味でも、あなたを含め、俳優や女優の方々を尊敬しています。

インティラー:ありがとうございます。実は、西さんにも質問がありまして。女性として文章を書かれていますが、男性やLGBTの方々の目線から物語を語っていますよね。登場人物を通じてご自身の声を聞かれるというのは、アヌソーンさんが役を演じているときに得る感情に近いのでしょうか。もうひとりの自分の中にご自身を探しているかのような。



西:お話を伺っていて、小説家は極端にわがままな人種なんじゃないかと思いました。どういうことかと言うと、例えば、インティラーさんが着ている白いシャツと同じデザインの白いシャツを私も持っています。ですが、あなたがそのシャツを選んだ理由は、私が選んだ理由とは違うかもしれません。私はデザイン重視で選びます。デザイナーはアイデンティティを表現する方法として、ひとつだけ違うボタンをつけるとします。でも、作家はもっと自我が強いです。作家は小説まるごと一冊を使ってアイデンティティを表

現します。小説のタイトルから装丁のデザイン、話の筋から登場人物に至るまで、作家は好きなように自分自身を表現することができます。このことから、作家は自分を基準に物事を決めるわがままな人種だと分かります。作家は高い個別意識を持ち、働き方においてとても自己中心的になります。

私の場合、長編作品で登場人物が一人称で物語を語るときは、男性の登場人物を使うことが多くなります。私たちは今、男性とか女性とか、性別をはっきりさせる必要がないジェンダーフリーな世の中を生活しているかもしれません。ですが、作家としては、実際の男性と女性のあり方の違いには注意しないといけません。女性の私が男性目線で物事を見なくてはならないのですから。

インティラー:現実味のある物語を伝えなければならないですね。

西:しかし同時に、考えの基となるのは私です。そして私の想いをその男性キャラクターに預けることになります。女性の価値観を男性の価値観に変換することでもあるのですが。そこが、この仕事の醍醐味ですね。

ウティット:司会を交代させていただきますね。あなたに質問です、インティラーさん。あなたは女優であり、作家であり、そして洋服の販売もしていると伺っています。様々な領域で活動されていますね。

インティラー:そうですね、割と自由です。

ウティット:では、お聞きします。今の生活に適応するための努力や、その方法についてお聞かせください。

インティラー:正直なところ、女優をしていることが役に立っています。まず、経済面で自立できています。それがひとつです。もうひとつは、ラッキーだと思うべきかわかりませんが、オバケなど、実生活で遭遇することのない役をいただける機会が多いのです。役者さんのインタビュー記事などを読むと、演じる人物について予習をされる方もいますよね。ですが、私の場合は、それは不可能です。

ウティット:修道女も演じられましたよね。

インティラー:そうですね、修道女や娼婦、麻薬の売人も演じました。戦士の王女なんていう役もありました。そういった役について勉強することはできませんから、自分の想像を膨らませるしかありません。想像上のキャラクターなので、解釈するときには、キャラクターを作った人たちでさえわからないこともあると思います。このオバケはどのように表現したらいいだろう、など。オバケですから。その空白を埋めるのが私の役割です。頂いた役を解釈する上で自由があるというのは良いですよ。他の役者や女優さんたちの演技方に合わせて自分も演じるのです。自分とは違う人物になりきることは大変だと思われることもよくありますが、私は違う人物になりきることを気に入っています。



私の場合、執筆などが自分を表現する方法になっています。例えば、ウティットさんの本を読んだとき、本がなにを伝えたいのかはわかりませんでしたが、一つ心に響いた文章があります。アヌソーンさんの本について感想を書いたのも、一つ心に響いた文章があったからです。私は読者であり、同時に作家でもあるということです。文学を理解するとき、女優であっても、作家であっても、自分は自分ですよ、もちろん。でも、ある程度自由があるので、自己表現する余地があります。だから、執筆は心地よく、精神面でも活力を与えてくれるものだと感じています。あまり苦しめられないということです。読者、作家、演者という三つの役割をできる限りバランスをとるようにしています。ですが、病気で鬱を患っていたころなど、あるところまで行くと・・・なんというのでしょうか・・・本や役を通じた自己認識はガラッと変わりました。

ウティット:すこしばやけましたか？

インティラー:そうですね。これがリアルなのか、他がよりリアルなのか、判断がつかないような。これを経験しているのは私自身なのか、それとも鬱だからこう見えるのか？ そのようなことです。作家目線でいえば、すごく興味深いです。これってリアルなの？ 違うの？ というような。無駄にしないように、この感覚を経験している間にできるだけたくさん執筆したいと思っています。モルモットの気分です。いつの日か完治したとき、この経験を二度と味わえなくなったら後悔すると思うので。

ウティット:経験された状態をですか？

インティラー:そうですね。私が経験した時間は、ネガティブな創造性にインスピレーションを与えたのです。鬱を患っていることに変わりはないのですから、さらっと流すことはないですよ。最近では、執筆業においても演技においても、私の日常が映し出されることが多くなりました。以前は、考え過ぎることが多かったです。例えば、役をいただいたら、その人物の設定を爪の長さまですべて考えていました。冗談ではなく！このような人物だったらマニキュアがすこし剥けているだろう、とか。

ウティット:与えられた役を超えて解釈してしまうのですね。



インティラー:最近では、表面的な解釈をするのではなく、彼らの生い立ちや過去を読み取るようになりました。「なぜこのキャラクターはこのタイミングでこのセリフを言うのだろう?」「なぜ涙を出しているのだろう?」と考えます。以前は理解することができませんでした。当時は、そのような役に対して「なにがそんなに悲しいの?」などと考えていました。今は、彼らの生い立ちを想像するようになり、人生や辛い出来事などを、理解できるようになりました。良いことなのか、悪いことなのかは分かりませんが。

ウティット:目に見える場面の裏側にも物語はありますからね。

インティラー:その通りですよ。

ウティット:どの人物にもそれぞれ生い立ちがあります。場面として見るのがないだけで。

インティラー:観ている人たちの目には映らないですよ。私は勝手に作りましたよ。例えば、家族が3、4人集まっている場面だとしますよね。今は他の人の役について、彼らがどのように生きてきたかなど、考えるようになりました。以前は、自分のことや自分の役のことしか考えていなかったのもっと深く考えるようになりました。年齢も関係しているのかもしれませんが。

ウティット:あなたのケースは、興味深いと思います。ここにいる3人(西、ウティット、アヌソーン)は作家ですが、あなたは女優です。私たちの人生に対する向き合い方が他とは違うということを理解していただけだと思います。インティラーさんのケースでは、役者の世界が心地よく、そして安全な場所だと感じているのかもしれませんが。他人になりきったり、役を演じたり。その一方で、実生活で自分らしく生きることに対しては不安があり、自分が落ち着ける場所に帰りたくなるのでしょうか。

インティラー:はい。

ウティット:恐らく、作家にとっても同じだと思います。

インティラー:自分でいるほうが安心ですよ。

ウティット:文章を書いている時間は、自分らしくいられます。

■人間の苦悩を美化する

ウティット:ところで、なんだか私が司会をしているようですね。それはさておき、これはクリエイティブな作品を創作しているときに費やすエネルギーに通じるものがありますよね。例えば小説を書いている時であったり、演じることであったり。創作するときに費やすエネルギーは作家の神経をすり減らすのだと、気が付いたのです。

インティラー:アヌソーンさんがライフスタイルを変える以前に経験していたようなことでしょうか。



アヌソーン:文学以外のことに向き合えない状態ですね。どのように説明したらいいのか……。

インティラー:他の事はまったく対処できない、ということでしょうか。

アヌソーン:そうです、執筆以外のあらゆる生活の側面が崩壊していくような感じです。

インティラー:社会生活も何もかも。

アヌソーン:ウティットさんが執筆した『On Literature』の内容がすごく好きなのです。その内容について、今日は考えていました。昨夜、香港のウォン・カーウアイ監督について話している人がいたのです。意味もなく空を飛ぶことに人生をなぞらえていました²。

インティラー:脚のない鳥のように？

アヌソーン:そのように言えると思います。一方で、話していた彼はそうありたくはないと思うのです。「Wong-ness」³ (ウォンらしさ)をカッコいいと言う人もいます。でも、実生活において同じ状況に置かれたと思うような人はいないと思いますよ。

ウティット:みんな苦しんでいますよね。

アヌソーン:そうです。女性に追いかけられるレスリー・チャンが演じるキャラクターを観て、カッコいいと思うのですよね。

²ウォン・カーウアイ監督作品「欲望の翼(Days of Being Wild)」(1990)からレスリー・チャン演じるヨデイへの言及

³Wong-ness または「kwaam Wong」とは、タイのサブカルチャーのトレンドの一種。ウォン・カーウアイ監督の映画で描かれている悲愁や空虚な様子がカッコいいとされ、一部の若い世代によって真似されるトレンドを指す。

インティラー:でも、現実の生活の中では、ライトを当ててくれる人もいないですし、撮影技術を駆使して美しく撮ってくれる人がいるわけでもありません。

ウティット:苦悩を美化しているのですよね。

アヌソーン:彼らはただ傷ついて苦しんでいるのですが、ロマンチックな人生を想像させるようですね。日本語で表現するのであれば、金継ぎの状態とでもいうのでしょうか。金継ぎとは、壊れているものを修復して、再度美しい状態にすることをいいます。「ウォン」らしさを求めている人たちは、生きるために自分たちの傷を癒そうとしているのですよね。



インティラー:ひとことでいうと、苦悩ですよね。

アヌソーン:そうですね。打ちひしがれたさまを見て、ロマンチックに感じるようですね。でも実際は……

インティラー:私があなたの人生をロマンチックにまとめてみますね。執筆活動をしていたが、神経がすり減り始めたので、食に関する旅に出ることを決断した。まさに、脚のない鳥ですね。

アヌソーン:当事者にとっては、苦悩を表現することが難しいようですね。彼らの苦悩には特定のイメージが持たれているようですが、当事者にとってはこれが辛いようです。物語の中のキャラクターのことであれば対応ができるのに、なぜ実生活においてはなにも対処することができないのか。自分の人生がうまくいっていない時、そう考えることはありませんか。それも課題ですよ。このような側面においても、執筆活動はエネルギーを消耗しますよね。

インティラー:そうですね。あなたもそうですが、作家はめちゃくちゃな人生を送っている人が多いですよ。役者もですが。あなた方を批判しているつもりはありませんよ。

ウティット:エネルギーを使って神経がすり減らされているかもしれませんね。

インティラー:そしてエネルギーが空っぽになると、自分のことしか考えられなくなってしまい、誰のことも愛することができなくなる。

アヌソーン:しかも頑固になって、物事を自分の思った通りに進めたいくなる。

■完璧じゃないということを受け入れる

インティラー：西さんはお子さんもいらっしゃるし、ご家庭がありますよね。私たち三人よりも、きちんとした家庭生活を送られています。どのような工夫をされているのですか？ お子さんや家庭をお持ちの方を心から尊敬しています。簡単なことではないですよ。考えてみてください。一日終わって疲れて帰宅したら、寝たいですよ。でもお子さんが待っていると、帰ったら遊んであげたいでしょうし、知能を発達させるために絵本も読んであげたいでしょう。ですが、もしも本を読んであげる気になれなかったり、寝たい、ビールを飲みたいというような気持ちになったりしたら？ 西さんはそのような瞬間はありますか？ 彼女はすべてをうまくやりこなしている感じがします。間違いなく私たちよりもしっかりしているように見えますよ。

西：質問に答える前に、別の話題についてお話しさせてください。小説がなければ、私は、作家として生活を成り立たせることはできません。小説を書くことができなければ、世の中で起きている悲惨な出来事を自分の中に取り込まなければならなくなります。私はこういう人間なので、できれば世の中で起きていることはできるだけ読むことも見ることもしたくありません。もし私が作家をしていなければ、社会で起きていることには見て見ぬふりをし、美しい夢の中で暮らしたいのです。かし、作家として、目を背けることはできません。良いことも悪いことも執筆するために、情報収集しなくてははいけません。



世の中で起きている良いことだけが小説に描かれていると思われがちです。しかし実際は、小説の核心や隠された部分に描かれていることは、アヌソーンさんとウティットさんが話していらっしやったような内容の場合が多いのです。社会や人間のひどい面など、不完全な物事が小説に描かれています。だから、作家は常に世の中のことに敏感でいて、作品の中にそれらを反映させなければなりません。

作家として、はじめにこのことをお伝えしておきたかったのです。完璧な家庭生活、そしてバランスの取れた生活を送っているという話ですが、私は決して理想的な人間ではありません。でも、こういった小説を書くことで、人間は完璧でないと理解することができ、そして私自身も完璧ではないと気が付くことができました。自分が完璧ではないのに、夫や妻、パートナーに完璧であることを求めることはできませんよね。そのような理由から、夫がすることについて気にならなくなりました。子育ても同じです。私は二

歳の子供の母親です。世間では、女性は全員母性があり、健康で完璧な母親でいなければならないと思われるかもしれませんが、でも、おかしいと思いませんか。事実とは違いますよね。私なりの育て方で、二歳児の子育てをしています。決めつけられた「ママらしさ」ではありません。

私は母親として完璧ではありませんが、完璧ではない姿を子供に見せたいと思っています。例えば「赤信号だから渡ってはいけない」という記号的な教え方をするのではなく、「車が来て危ないから渡ってはいけないのだ」と教えています。そして、もちろん私も間違ふことがある、と伝えます。自分が正しいと思うことは自分を信じなさい、なんでもかんでも母親を信じる必要はないのだから、私はあなたのすべてではない、と教えています。これが私の子育てです。

■身体は神聖な場所：作家として、アーティストとして

インティラー：最後の質問です。経済的に余裕があるとします。どのような要因があれば、もう一度小説の執筆活動に戻りたいと思われますか。まだ探求してみたいことはありますか？書いていただけるなら、毎月 40,000 バーツお支払いしますよ。伝えたい物語とか。人生が何もかもうまくいって、ようやくその物語を伝えるエネルギーがある状態だとしましょう。

ウティット：西さんが先ほど言われたことです。先ずは、欠点を受け入れること。そうすると、身体的、精神的、ましてや社会的な欠点がすべてではないと分かる。人を安心させる悩みなんてないことが分かるのです。どうぞ説明するべきか分かりません。社会が変わったとしても、探求したい不満やアイディアはまだあるので、書きたいことはあると思います。それに、愛や憤りなど、その他にも書きたいことがあります。



インティラー：結局のところ、私たちは人間なのです。

ウティット：欠点がない状態にはまだ到達していませんからね。まだまだ未熟で、完璧さについてたくさん疑問を抱いています。なので、どのような社会に生きていても、そして安定した収入があったとしても、とくに 40 代の今考えると、疑問に答えを出そうとしたとき、もうその段階ではないのかと思うのです。収入について心配する段階は過ぎたのかな、と。今は、自分自身との闘いです。問題は、44 歳にして、これまで本を書く際に費やした分と同じ量のエネルギーが必要なのかということです。人生の中で、また新たな段階に入ろうとしているような感じがするので、同じ分量のエネルギーが必要なのでしょう。ここ数年に渡り、演劇作家の岡田利規さんと一緒に舞台で働けたことは私にとってプラスだったと思います。他のアートについて理解を深めることができました。今回のケースでいえば、演劇の技術です。働き方に変化を求めていたのも、ちょうどこのころです。結果的に岡田さんとは良いタイミングで出

会えたと思います。岡田さんの作品をご存じの方はお分かりだと思いますが、彼の劇は「リアリスト」な演劇と言い難いでしょう。誇張された、パフォーマンスの中でパフォーマンスが行われているような作品です。私自身の創作過程について考えさせられました。役者や演じること、または執筆そのものについて書くとしましょう。そこに費やすエネルギーは、演じる役になりきったり、誇張したりすることと比較することができると思います・・・

インティラー: 自分の足の骨を自分で殴って折るような。

ウティット: そうですね。人生のすべてを注ぎ込むような感じです。ホアキン・フェニックスのように。演じている役に飲み込まれる、といいますか。もうそういったことができる段階ではないと感じました。健康を保ちながらエネルギーを注ぐ方法を見つけなければいけません。同時に、読者に伝えたいメッセージや想いの強さは保たなければなりません。エネルギーの新たな源を見つけるということです。

インティラー: 分かります。役を演じるとき、以前は自分にとても厳しくしていました。でも、今は身体がついていきます。

ウティット: 燃え尽きるまで頑張らなくてもいいはずですよ。作品にどれだけの力を注いできたか、自分で把握していることが厄介ですよ。読者が作品を目にすると、届けたいメッセージが伝わる人もいますが、まったく響かない人もいますよね。大したことではないはずなのに、これらはすべて作家の心に影響します。私たちにできることといえば、作品が読み返してもらえるのを待つことです。文学に込められたメッセージというのは直球ではありませんよね。初めて読んだ人たちが全員同じように受け取ることはありません。様々な要因があるので、25歳の時の創作方法を今の年齢に合うように調整するべきか考えたほうがいいでしょう。

インティラー: アヌソーンさんはその段階を過ぎたようです。以前から存じ上げているので、いつになく決然たる態度を感じます。今以上に決意を感じる瞬間は今後あると思われますか？

アヌソーン: おっしゃろうとしていること、すごくよく分かります。若い作家に会うと、若い頃の自分と重ねてしまいます。サッカーでいうならば、何度も何度もゴールまで走って得点を決めたいと思うようなものです。しかも楽しみながらね。

しかし、この年齢になると、90分体力を維持する方法を考える必要があります。無限に体力があるわけではないと気が付かなければなりません。朝3時まで書き続け、朝6時に起きるという生活は理想的ではありません。興奮状態に陥って自分はカッコいいと満足するかもしれませんが、肝心なことは、それをするだけの力がもうないということです。エネルギーの使い方を変えれば、不必要な物事を生活から削ることができます。参加しなくても気にならないイベントもあるでしょうし、会わなくても気にならない友人もいることでしょう。彼らは本当の友達ではないかもしれませんがね。ふるいにかけると、多くのことは削られます。結局のところ、時間は限られていて、自分のエネルギーにも限界があるということです。他のことをしていても、心は文学にありますよね。他の用事を済ませてから、机に戻って書く。そしてその後また他のことをする。

「有名な作家になりたい」と名声を追いかけるよりも、エネルギーをバランス良く使い、温存することを考える。カメラに映りたくてフィールドを端から端まで走る選手と同じような気持ちだと思います。90 分の例えで考えると、体力を維持する方法を知っている選手は、ボールを他の選手にパスするタイミングを見つけることができる・・・

インティラー: スポットライトは浴びないけれど、試合には大切な存在である、と。

アヌソーン: 年齢を重ねるごとに、幸せを見つけることができるのだと思います。ウティットさんにしても、彼はビールを飲みますが、無理な飲み方はしません。多くのことは・・・本日の論題である「反抗」や「制度に立ち向かうこと」にしても、有名になるための手段ではありませんよね。いきなり「有名になりたいから反抗する」という考えに至るわけではありません。そうではなく、残りのエネルギーを守るために、そして効果的に使うために反抗するのですよね。

ウティットさんの展覧会には必ず行っていて、初日に行ったことも 2 回あります。ファンなので。彼の絵画が相当な金額で売られていた時代から、ごく最近のものまで知っていますよ。絵画一つが本のライセンスに相当する金額でした。「執筆する必要なんてないじゃないか」と思いました。彼のアートは本のライセンスと同等の価値がある。それでも、彼は小説が書きたい。これらのことからお分かりいただけたと思いますが、執筆する以外で生活を支える方法やエネルギーの源を見つけると、書こうと決意するし、書きたいものをもっとうまく書けます。すごく助かりますよ。私は、絵は描きませんが、作家以外の収入源があるということは食べるのには困りませんよね。この 1 年地方に住んでいますが、地域の方々がお米を分けてくれるのです。こちらの方から一袋、あちらの方から一袋、というようにね。5 年分のお米があります。ですので、私も食べていけます。

作家活動において、私が最も重要視していることはバランスを見つけることです。翌日の食事の心配をしなくてもよいという意味でのバランスです。そこが多くの方々にとって問題のようです。文学について語るとき、作家も生きていかなければならないということが見過ごされていると思います。西さんが先ほど言われたことですね。タイ文学も、高尚なものだと思われると思います。タイ文学は物理的な問題より、イデオロギーについて書かれていることが多いので。

インティラー: でもその通りです。生活が安定していると、執筆したくなります。時間に余裕ができ、ストレスも感じません。

アヌソーン: 他人に優しくなりますよね。最近では、他人と競争する必要性を感じなくなり、ライバル視することがなくなりました。頼まれれば、助けたいと思います。年齢を重ねたことで、世の中のことを理解することができたかのようです。相手が自分を嫌っているようが、ファンであろうが、私は私ができることしかできません。

インティラー: 若いころは自分に対して厳しくなるといったことなど、年齢についてウティットさんとアヌソーンさんが議論なさっていました。西さんは同じようなご経験はありますか？また、ご自身でどちらの時

期の自分が好きですか？ 自分に厳しかった時期でしょうか？ それとも、自分の全てを受け入れることができて自分自身に満足した時期でしょうか。

西: 私にとって若さとは・・・若いころ私が最も恐れていたことは老いることでした。身体的な老いではなく、精神的な老いです。人間誰しもが恐れていることかもしれませんね。ウティットさんの小説、『プラターナー 憑依のポートレート』も若さがテーマですね。政治家の方は常に物事をコントロールする力を保っていく必要があるという点で、いつも若さを維持されていますよね。しかし実際は、人生においてすべてを思い通りにすることはできません。アヌソーンさんが言われたように、年齢を重ねるにつれて、思い通りにできないことに対してこだわらなくなります。

私の初期の作品を見てみると、内容がドラマチックで、クライマックスに向けて緊張感がどんどん増していきます。そしてドラムロールで盛り上げた後、最後の結末でたった一つの真実が読者に伝えられます。当時の作品を思い返すと少し恥ずかしいです。そうでなければならないのでしょうか？ どうして唯一の結論を披露する必要があるのでしょうか？ 年齢を重ねるにつれて、良い小説はたった一つの答えを提示する必要がないと気づきました。読者が新たな疑問を持てるように、またそれぞれの結論を見出せるようにするべきである、と。これらのことが作品に反映されているという意味では、年齢を重ねてよかったと、作家として思います。

インティラー: 本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございました。若さや年齢を重ねることについてのお話、皆様楽しんでいただけたでしょうか。反抗的な人たちも年を取るのです。反抗して若くして死んだ場合、伝説になります。死ななければ、年をとります。チェ・ゲバラ並の反抗パーティーには行くのをやめてしまうでしょうね、よぼよぼですから。皆様、本日はありがとうございました。観客の皆様、そしてステージの作家の皆様、ありがとうございました。サワディーカー。

西加奈子氏及び対談者略歴

●西加奈子

1977年テヘラン生まれ、カイロ・大阪育ち。2004年に短編コレクション『あおい』で文学界デビューを果たしたのち、2007年に『通天閣』で織田作之助賞、2013年に小説『ふくわらい』で河合隼雄物語賞、2015年に『サラバ!』で直木賞を受賞。『さくら』『円卓』『i』『おまじない』など著書多数。



●インティラー・ジャルンプラ

女優。1980年バンコク生まれ。13歳で歌と演技を本格的に始める。タイで語り継がれる女性の霊や、戦士の王女を演じた映画作品で、タイでは広く知られる。また、近年では自身のうつ病の経験をもとにした著作も複数発表し、女優以外の活動の幅を広げている。



●アヌソーン・ティパヤーノン

作家。東南アジア文学賞に3度ノミネート。散文的な要素や、作品に感じられる孤独感や喪失感から、「タイの村上春樹」と呼ばれる。著作は、『London and the Secret of the Kiss』、『8 1/2 Richter』『In Search of the Lost Blue Heart』など多数。執筆・翻訳業のほか、タイの大学で美術評論、映画、文学、建築デザインについて教授歴もある。



●ウティット・ヘーマムーン

作家。1975年タイ・サラブリー県ケンコーイ生まれ。長編小説『ラップレー、ケンコーイ』で、東南アジア文学賞とセブン・ブックアワードを受賞。2014年には、京都での滞在経験をもとにした小説『残り香を秘めた京都』を発表。2017年に出版された『プラターナー：憑依のポートレート』は、岡田利規によって舞台化され、バンコク、パリ、東京で上演。ビジュアル・アーティストとしても活動。



参考：<https://neilsonhayslibrary.org/literature-festival/>